



aiko—私のホーム

会員 上村 昌平 (73期)

1 音楽は人生を彩る。嬉しいときは気分を高揚させ、悲しいときは傷を癒やす。学校が苦手でも、笑うのが苦手でも、明日はいいことがあるようにと願いながら音楽を聴く。音楽は心に安らぎをくれるホームのような存在だ。私にとってのホームはaikoの音楽だ。

2 試験勉強をしているとき、aikoの音楽はいつもそばにあった。

夜、勉強を終えて駅から家に歩いて帰るときには、必ず『星物語』という曲を聴いていた。

試験会場に乗り込むときイヤホンから流れてきたのは『戻れない明日』という曲だった。司法試験受験生を主人公にしたドラマの主題歌だ。

3 私がaikoのことを知ったのは1999年の暮れだった。『カブトムシ』のメロディが耳に残り、アルバムを入手して聴くようになった。耳慣れないコード進行。4分の1音ずれていると錯覚する奇妙な音程。位相空間論という孤立点のように、似ているものなど存在しない独特の存在感。たちまち夢中になった。

2000年5月15日、私は初めてaikoのライブに足を運んだ。

ステージをパワー全開で走り回る歌姫。しかし歌声は全く乱れない。パフォーマンスはCD以上。これほど躍動感にあふれたライブは初めてだ。私の心に火がついた。

4 aikoライブの魅力のひとつは、aikoとファンとの密な交流にある。aikoもいつものファンに囲まれていることを求める。フェスには出ないし、テレビ番組に出演するときは借りてきた猫のようおとなしい。しかし、単独ライブの会場では、水を得た魚のように躍動する。そこがaikoのホームなのである。

aikoとファンとは一対一だ。ライブに参戦すると、まるでaikoと個々のファンとが、aikoを中心に放射状の糸でつながっているように感じる。

5 2020年2月、世界的な感染症流行の波が日本にも押し寄せてきた。3月8日に予定されていたaikoの最終公演も延期となってしまった。私は唯一の楽しみを失った。だが、「中止」でなく「延期」としてくれたことは、私に心の抛り所を与えた。

そして、aikoは、オンラインライブの無料配信というサプライズをプレゼントしてくれた。

2020年3月8日、最終公演が開かれるはずだったライブハウスから、オンラインライブが配信された。

最後に歌ったのは『さよなランド』という曲だった。ピアノ基調の伴奏が始まる。暗がりの中で祈るように歌うaiko。透明感のある声が響き渡る。やがてドラムが加わり、カメラが引いていく。その日私たちが居るはずだったフロアが映される。そこには、息をのむ光景が広がっていた。

床に整然と並べられた無数のスポットライトが淡い光を放っていたのだ。その一つ一つは私たち一人一人のファンを象ったものだった。aikoは、いつも見守っているファンが誰一人居ない会場で最高のパフォーマンスを見せてくれた。そして、最後の最後に、ファンの一人一人とつながっているということをこれ以上ない形で示してくれた。

私はこの日のライブを生涯忘れることはないだろう。

6 感染症の流行により人々の生活は変容した。ライブハウスでの公演は濃厚接触の最たるものだ。しかし、私は再びライブが開催される日がくることを信じて、最終公演のチケットを払い戻さずにいる。

私の帰ってくるべきホームはそこにあるから。